

岐阜市立女子短期大学の移転の経緯

新聞記事に着目して

The relocation of Gifu City Women's College Focusing on newspaper articles

白井 直之

Naoyuki USUI

Abstract

The Gifu City Women's College moved from Nagarafukumitsu to Hitoichibakitamachi in 2000. This report intends to describe order of events of the relocation in the newspaper. According to records, the trigger of the relocation was due to the deterioration and narrowness of the old campus buildings, and the change of the environment around the site. In addition, requests from the community for the higher education facilities forced the campus transfer. It was in 1989 that the mayor of Gifu City expressed his desire for the relocation to the city council and from that time, it took 11 years to complete. Meanwhile, proposed sites for the new campus changed from Kidaijiyama to Shimokidaiji, to Koran and then to Hitoichiba.

Keywords: 岐阜市立女子短期大学、移転、新聞記事

1. はじめに

岐阜市と聞いてイメージするものは多々あるが、金華山と長良川の存在は岐阜の街に大きな魅力を与えていると感じる。そして、現在は岐阜市西部にある岐阜市立女子短期大学（以下、岐女短¹）もかつては金華山近くの長良橋を北に渡りそこから徒歩 10 分程度の長良川沿いという、岐阜の地を堪能する上で恵まれた位置にあった。（図 1、2）

1.1 背景

岐女短は終戦直後の 1946 年²に岐阜女子専門学校として岐阜市長良福光（以下、長良福光）の地に創設された。そして、2000 年には岐阜市一日市場北町（以下、一日市場³）へ移転し、2016 年で創立 70 周年を迎えた。

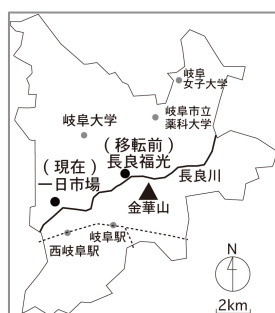


図 1 移転前と現在の位置関係

1.2 目的

藤田市長⁴が 1989 年に岐阜市議会（以下、議会）にて移転を表明してから 2000 年に一日市場への移転が完了するまでには、約 11 年が経過した。

本稿では、その間起っていた事を明らかにすべく、岐女短が長良福光から一日市場へ移転するまでの大きな流れをまとめる事を目的とする。

なお、長良福光での岐女短キャンパスを桃林キャンパスと呼ぶ。

1.3 研究方法

移転前の事を知る教職員もおり、関係者へヒアリングする事で本稿の目的の大半は達成できるとも考えられた。しかし、大きな流れを掴むという本稿の目的に沿うよう、人の記憶に頼る事は最低限に留め、新聞記事に着目した。また、新聞記事の内容が議会における答弁を元にする場合には岐阜市議会本会議事録（以下、議会録）にも遡り、その内容の妥当性を確認しながら記述した。

新聞記事を見つける方法としては、岐阜県図書館の蔵書検索データベースを利用した。1980 年⁵から 2000 年の岐阜新聞および中日新聞を対象に、「岐阜市立女子短期大学」「岐女短」「女子短大」「岐阜女子短」という 4 つのキーワードのいずれかが含まれる記事を検索し、得られた記事のタイトルから岐女短の移転あるいは改組に関係が深いと思われる記事を抽出し、新聞記事を読んだ。閲覧した新聞記事の主見出しと袖見出し⁶とを表 1 に示す。

岐阜市立女子短期大学の移転の経緯

表1 閲覧した新聞記事の一覧

発行日	新聞	主見出し	補見出し
1983年2月15日	岐阜新聞	岐女短新学長に根岸氏	-
	中日新聞	学長に根岸氏	市立岐阜女子短大
1987年4月4日	岐阜新聞	学長に根岸氏再任	岐阜女子短大
1987年12月16日	岐阜新聞	岐女短に改築構想	岐阜市議会で市側答弁 一般質問2日目
	中日新聞	(共同作業所設立を検討)	岐阜市議会 岐阜女子短大の改築
1989年2月15日	岐阜新聞	新学長に小瀬氏	岐阜市立女子短大
1989年4月4日	中日新聞	国文学研究に専念	岐阜女短 根岸学長が退官の弁
	中日新聞	岐阜女子短大に小瀬氏	-
1989年6月22日	岐阜新聞	岐阜女短、移転も	岐阜市議会 一般質問初日 藤田市長が示唆
	中日新聞	岐阜市立女子短大 移転の必要性示唆	市議会で市長 充実発展に不可欠 学部、学科の見直し計画
1989年8月27日	中日新聞	岐阜市立女子短大の小瀬学長が 就任講演	岐阜グランドホテル
1989年9月17日	岐阜新聞	来春、新選修を設置	岐阜市女子短大の服飾コース ファッション工科大構想で学長 岐阜市議会一般質問
1989年12月12日	中日新聞	新入生から教職課程廃止	岐阜女短学長 移転、学科問題で答弁 岐阜市議会
1990年1月7日	岐阜新聞	懇談会発足へ、24日初会合	岐阜女子短大の将来像策定へ
1990年1月25日	岐阜新聞	「4年制」など話題に	岐阜女子短大 「将来計画懇」が初会合
	中日新聞	移転の必要性を説明	岐阜市立女子短大将来計画懇 「4年制」も示唆
1990年3月17日	岐阜新聞	男女共学の4年制に?	岐阜女子短大 国際化に対応を 将来計画懇 来月にも中間報告
	中日新聞	共学の4年制移行も	岐阜市立女子短大 市議会で小瀬学長答弁
1990年10月9日	岐阜新聞	4年制へ移行すべき	将来計画懇談会の検討内容まとまる 平成7年移転予定の岐阜女子短大 実務教育にも力点 岐阜市 審議会設置し実現へ
1990年11月7日	中日新聞	岐阜市女短大の将来像を冊子に	計画懇が会合内容をまとめ 岐阜女子短大
1990年12月12日	岐阜新聞	学科、組織の改変検討	岐阜市立女子短大 学長が市議会で答弁
	中日新聞	移転を機に学科改組	岐阜市立女子短大 学長が市議会で答弁
1991年1月28日	中日新聞	地元密着型短大を直撃	平成5年度から18歳人口が激減 “生き残り策”模索 4年制移行には難問 “実用的学科”で活路 岐阜市女短
1991年2月11日	岐阜新聞	移転候補地決まる	下城田寺などの丘陵地に 岐阜女子短大
1991年2月13日	中日新聞	移転候補地決まる	岐阜市立女子短大 現在地の北2キロへ
1991年2月16日	岐阜新聞	初の地元説明会	岐阜女子短大移転 候補地決定で住民質問
1991年4月28日	岐阜新聞	用地の遺跡調査を	岐阜女短移転で郷土史家
1992年6月16日	岐阜新聞	移転計画、暗礁に	岐阜女子短大 事前調査不十分 北部丘陵地は断念
	中日新聞	下城田寺地区への移転断念	市岐阜女子短大 造成直前 地盤弱いと判明
1992年6月18日	岐阜新聞	不手際を認める	岐阜女子短大移転計画断念 市幹部らが陳謝
	中日新聞	不手際認め陳謝	岐阜女短移転断念 岐阜市議会で助役
1993年2月8日	岐阜新聞	新学長に喜多村氏	岐阜女子短大
	岐阜新聞(夕刊)	新学長に喜多村氏	岐阜女子短大
1993年3月5日	岐阜新聞	県公立大協会が発足	岐阜薬科大と岐阜短大 予算協力や交流検討
	中日新聞	公立大学協が発足	「冬の時代」乗り切りへ結束 岐阜薬科と岐阜市女短 学術交流を推進へ
1993年3月17日	岐阜新聞	岐阜市常盤地区で検討	学長が市議会で答弁 新学科の設立も
	中日新聞	新たに移転地浮上	学長表明 4年制移行は困難
1993年4月3日	岐阜新聞	移転が最大の課題	岐阜短大の喜多村新学長 岐阜市役所で会見
1993年4月4日	岐阜新聞	“四大構想”の発展に期待	-
1993年12月1日	岐阜新聞	下城田寺地区に絞る	岐阜女子短大の移転先 岐阜市が交渉
1993年12月16日	岐阜新聞	学科増設を白紙撤回	市立女子短大 教員定数など足かせ
	中日新聞	「常盤地区下城田寺」が候補に	岐阜女短の移転先 学科再編は再検討中
1994年4月7日	中日新聞	常盤地区、移転“OK”	岐阜短大 地権者が売却合意
1994年4月27日	岐阜新聞	きょうらマダ社と契約	岐阜ルネッサンスホテルの運営委託 来年夏にオープン予定
1994年7月27日	岐阜新聞	岐阜市が「総合大学」構想	岐阜薬科大、市立女子短大など統合 来年中にも検討委設置 4次総に盛り込み 少子化、環境変化に対応

発行日	新聞	主見出し	補見出し
1995年6月16日	岐阜新聞	移転計画が暗礁に	岐阜市立女子短大 候補地の取得困難
	中日新聞	市長、実現へ慎重発言	岐阜女短の常盤地区移転 岐阜市議会
1995年6月30日	岐阜新聞	きょう最終説明会	岐阜女子短大 移転計画で岐阜市長
	中日新聞	急がれた岐阜女短移転	跡地、会議場駐車場に 果が検討
1995年7月1日	岐阜新聞	最終説明会も物別れ	岐阜市立女子短大の移転先 岐阜女子短大移転計画 岐阜市長「新たな候補地検討」
	岐阜新聞	文化系学科を新設	岐阜女子短大 人材ニーズに対応 4学科へ改組検討
1995年12月19日	岐阜新聞	鳥校区移転が濃厚	岐阜女子短大 岐阜市「下城田寺」を断念 市有地からの選定着手
1995年12月23日	中日新聞	下城田寺地区を断念	岐阜女子短大移転計画 岐阜市議会委で市側 鳥島地区が有力に
1996年2月6日	中日新聞	「4年制改組に全力」	岐阜市立女子短大 喜多村新学長が会見
1996年3月14日	岐阜新聞	「鳥第2中」用地が候補	岐阜女子短大 浅野市長表明 鳥島地区移転を推進
	中日新聞	基盤整備され自然環境も良好	岐阜市議会 女子短大移転問題 鳥島運動場の利点説明 市長
1996年3月15日	岐阜新聞	12年度には開校	岐阜市立女子短大 浅野市長が移転見通し
1996年5月31日	岐阜新聞	地元が受け入れ合意	岐阜市立女子短大の鳥島地区移転 岐阜市 6月議会に予算案
1996年6月5日	岐阜新聞	調査、設計費盛る	岐阜市立女子短大の鳥島地区移転 市補正予算
1996年6月6日	中日新聞	移転先は鳥島運動場	岐阜市立女子短大 12年9月開校目指す
1996年6月8日	岐阜新聞	(補正予算は66億円)	岐阜市議会が閉会 岐阜女子短大移転候補地調査費など 19議案上程 浅野市長が提案説明
	中日新聞	都市基盤整備に重点	岐阜市議会開会 補正予算案など上程
1996年6月15日	岐阜新聞	移転を機に内容充実	市立女子短大 岐阜市議会、一般質問始まる 市長答弁 専攻科の設置検討
	中日新聞	4学科に再編	12年移転開校目指す 岐阜市立女子短大 専攻科も設置 市議会で市長構想明かす
1996年10月2日	岐阜新聞	15日に50周年記念式典	岐阜市立女子短大 篠田正浩氏が公團
1996年10月15日	岐阜新聞	国際化時代に対応	50周年の岐阜市立女子短大 喜多村学長に聞く
1996年10月16日	岐阜新聞	「半世紀」に感慨	岐阜女子短大 創立50周年祝ひ記念式典 移転に向け 飛躍を期す
1997年2月11日	岐阜新聞	学長に喜多村氏再選	岐阜市立女子短大
1998年2月27日	岐阜新聞	5月着工、4年制目指す	移転の岐阜女子短大 国際文化学科を新設
1998年3月1日	中日新聞	移転建築工事スタート	市女短大 4年制移行へ施設整備
1998年7月29日	中日新聞	市長がかわ入れ	移転工事の安全祈願祭 岐阜短大
1998年10月29日	岐阜新聞	起工式、安全を祈願	移転新築の岐阜女子短大 浅野市長ら出席
1999年2月13日	岐阜新聞	岐阜市立女子短大新学長に杉山氏	-
	中日新聞	杉山氏の次期学長就任内定	岐阜市立女子短大
1999年4月6日	岐阜新聞	世界にPRできる人材を	岐阜市立女子短大の 杉山新学長が抱負 地元の産業教育に力 市長が辞令交付
	岐阜新聞	4年制移行、2003年度にも	岐阜女子短大 4大志向高まり
1999年10月3日	岐阜新聞	新世紀のキャンパス創造	岐阜女子短大来春4月移転 地域に開かれた施設に 国際人の育成へ新学科
1999年12月23日	岐阜新聞	国際文化学科の募集要項を発表	岐阜女子短大
	中日新聞	国際文化学科の入試要項を発表	岐阜市立女短大
2000年1月25日	岐阜新聞	県、駐車場に活用へ	岐阜短跡地 県、駐車場に活用 岐阜総体などイベントで
2000年2月20日	岐阜新聞	“岐阜短”愛身中	創立55年目の岐阜市立女子短大 地域に密着、開かれた大学に 移転機に「国際文化学科」新設 少子化や四大志向高まる中 生き残り戦略 構想委員会設置 共学化も視野に
2000年3月11日	岐阜新聞	「心豊かな女性に成長を」	岐阜市立女子短期大 3学科240人が学びや後に 来月移転 桃林キャンパスは最後
2000年3月12日	中日新聞	思い出のキャンパスに別れ	岐阜市立女子短大 来月、新校舎に移転 在校生800人の集い さよならパーティー
2000年4月8日	岐阜新聞	移転の新学舎完成式	岐阜市立女子短期大学 浅野市長らテープカット
	中日新聞	完成新校舎お披露目	移転の岐阜市立女子短大 きょう一般開放

2. 移転のきっかけ

2.1 蒔田市長による移転表明

岐阜市立女子短期大学 50 年史(以下、50 年史)によると 1989 年 6 月に蒔田市長が議会にて校地移転を検討するとの見解を表明したと記載されている。同年同月 22 日付の中日新聞にはその事が記載されており、また議会録⁷を照らし合わせると発言内容は次のように整理される。

- ・岐女短の施設は老朽化し、手狭になっている。
- ・岐女短は 1995 年度の創立 50 周年を契機に学部学科の見直しや校舎の改築を計画している。
- ・周辺は長良川メッセを中心とするコンベンション都市づくりや発展のための重要整備地区である。
- ・建設省が隣接する市立長良中学校の一带でスーパー堤防（高規格堤防）の建設を計画している。
- ・岐女短及び周辺環境の充実発展のためにも移転が必要な時期が来る。

その時の岐女短学長（以下、学長）は小瀬洋喜⁸であった。小瀬学長は、先の蒔田市長による議会での答弁の約 2 か月前、4 月 4 日付けで学長に就任した。それ以前は根岸正純⁹が学長を勤めていた。そこで、根岸学長時代に遡る。

2.2 移転表明の前

1987 年 12 月 16 日付け中日新聞に、議会にて岐女短の改築に関して、現在地での改築を基本とすると書かれている。

その内容が議事録に残されており、岐女短の施設の老朽化や改築計画について尋ねられた蒔田市長は次のように答弁した¹⁰。雰囲気は伝わるのでそのまま引用する。

（略）外で改築して大きいキャンパスの中に、あるいはまた周囲の環境のいい所にといいようなことも思い浮かべたこともございますし、あるいはまた現地の今まであったということと、そして現地もいい環境にありますので現地ではどうかと、いろいろこう考えるわけでありまして。移転をすとなると、これまた大きな費用負担があるということがございます。したがって、学校当局との相談の中でも、まあいろいろあるが高層化をして現地改築というような進み方でどうだろうかというようなことを、今までにも相談をしたわけでありまして。（略）

市長の答弁の中では、移転も視野には入れて検討をしていた事が伺える。しかし、費用の事を考えると現地で高層化するという考えが強いようである。

また、同議会では根岸学長も答弁¹¹しており、増改築す



図 2 1976 年度卒業アルバム掲載の航空写真

る際の基本目標として次の 4 つをあげた。

- ・少人数教育の徹底
- ・近代的な施設の整備や機器の導入
- ・地域に寄与するコミュニティーカレッジ
- ・短大の二年間の学習を補完する一年課程の専攻科設置

その根岸学長は任期満了で 1989 年 4 月 3 日に退任し、その翌日付けの中日新聞には退任の弁とする記事が掲載される。そこには、根岸が教授会構成メンバーを改めた事他に、手狭で老朽化したキャンパスの改善計画に取り組んだと、記載されている。

再び時を進める。先に示した 1989 年 6 月の市議会での蒔田市長の発言以降は、移転という方向で進んでいったようだが、同時に岐女短の将来像を探る動きも始まっていた。

2.3 将来計画懇談会

1990 年 1 月 24 日には「岐阜市立女子短期大学将来計画懇談会」(以下、将来懇)の初会合が開かれた¹²。将来懇は、小瀬学長の提案により開かれた、議会、教育、産業関係者などの 20 人の委員によって岐女短の将来のあり方を総合的に検討する機関であった¹³。発足の背景として次のような事情があげられた¹⁴。

- ・施設の老朽化
- ・四年制大学志向の強まり
- ・岐阜メモリアルセンターの整備、隣接する長良中学校跡地での長良川メッセの建設構想により、周辺環境が教育の場に適さなくなっている事
- ・メッセ充実のために短大敷地も利用との意見

将来懇は合計 3 回開催され、次のような懇談意見があがり、それらは冊子にされた¹⁵。

- ・現行の女子短大の良さも認めながら、時代の流れに即して四年制に
- ・四年制にするなら男女共学に
- ・全国から人材の集まる魅力ある大学に
- ・県内の大学に欠けている商経、法、人文、国際文化などの学部を持つ文科系大学に
- ・生涯教育にも役立つような夜間部の設置
- ・女子短大を併設

しかし、1991年1月28日付け中日新聞には、岐女短がそれまでに進めていた改革の骨子は将来懇の結果とは異なり、現行の短大の形のまま維持する内容だったという記事が掲載されている。その理由として、40万人都市が2つの大学¹⁶を財政的に支え得るのかという不安、当時の大学新設の抑制の流れ、女子の高学歴志向の受けざらとして短大が担う部分は依然として大きい事が挙げられている。新聞記事には1990年度の岐阜県内の女子進学者のうち、短大進学者は3,858人(63.5%)、四大進学者は2,213人(36.4%)である事が示されている。

3. 移転先

3.1.1 長良川より北

さて、移転を機により魅力的な大学へと変革を遂げようという動きがあった事は将来懇の意見からも伺えるが、移転先についてはじめて新聞記事が言及したのは1990年12月12日である。新聞記事¹⁷では議会での市長の答弁より、「候補地はあるが長良川より北側で平地より高い所」と言うに留まったとしているが、議事録¹⁸を確認すると、東海環状道路の開通も視野に入れて敷地を選定しようとしている事がわかる。

3.2.1 城田寺山が候補地に

新聞記事に『移転候補地決まる』という見出しが掲載されたのは1991年2月11日付け岐阜新聞であり、続いて13日付けの中日新聞でもほぼ同様の内容が報じられた。

両記事によると、候補地は下城田寺、打越、上土居にまたがる山林および農地の丘陵地帯(以下、城田寺山¹⁹)であり、長良福光からは約2キロ余り北に位置する(図3²⁰)。その計画は次のような



図3 候補地(城田寺山)の位置

内容だった。

- ・一帯の約12haを市が買収し、このうち約5haを大学の敷地とする。
- ・この付近は丘陵地で標高は最も高い所で96.5mあるため標高約40mの高台に整備する。
- ・敷地周辺も公園空間に整備するほか、キャンパスに市民が自由に入出入りし、生涯学習教育にも利用できるよう、開放的な雰囲気にする。
- ・用地買収費、整備費には数十億が見込まれる。
- ・1991年度から予算化し1996年秋に移転完了を目指す。

地元説明会は1991年2月14日に打越の常磐公民館で開催された。出席したのは地権者、自治会長、農業団体代表らと、市側からは事務助役、技術助役、企画部長、大学から小瀬学長らであった。しかし、地権者や住民のほとんどが候補地となっている事を知らなかったという²¹。

3.2.2 城田寺山を候補地とした理由

候補地とした理由に関しては、後の1992年6月議会にて助役が次のような内容の答弁をした²²。

- ・城田寺山は濃尾平野が一望のもとに眺められる。
- ・環状線にも近く、また交通網の整備が進みつつある。
- ・自然を活用したスクールガーデン的な構想で建設すれば、女子の短期大学として適地となると考えた。

また、1991年2月11日付け岐阜新聞には、柳戸に国立岐阜大学²³、三田洞に岐阜市立薬科大学、太郎丸に岐阜女子大学²⁴があり(図1)、岐女短がこの位置に移転すると、岐阜市の北部地区が「一大学園都市」となる事が記載された。

3.2.3 城田寺山を断念

その後も地権者に対する交渉や地元説明会は継続されたが、初の地元説明会からおおよそ1年4ヶ月後の1992年6月16日付け岐阜新聞に『移転計画、暗礁に』、同日付け中日新聞でも『下城田寺地区への移転断念』と題する記事が掲載される。その主たる理由は住民の反対等ではなく、地盤の問題であり、要約すると次のようであった。

- ・民間業者による調査で、岩盤の構造が弱く、土砂崩れを防止のための擁壁の建設が必要だと分かった。
- ・地質を改善する工事は可能だが工事費が予定をはるかに上回る。
- ・当初防災壁と建物建設費を含む総事業費は90億円から100億円を予定していたが、倍近くかかる。
- ・用地は丘陵地で、通学路はカーブや急勾配になる。

岐阜市立女子短期大学の移転の経緯

翌日 17 日の市議会では、複数の議員から移転を断念した件に関する質疑がされた。その中には、地質調査をせずに用地買収や造成費を予算化した事が杜撰という指摘や、過去の開発計画や災害などから地盤の弱さは地元では周知の事だった点を指摘するものもあった。それに対し市は、対応に不手際があった事を認めた²⁵。

3.2.4 城田寺山を断念した運営上の理由

移転を断念した主な理由は、地盤が軟弱であるために工事費がかさむという事だったが、大学の運営という観点からは、小瀬学長が次のように答弁²⁶した。

- ・防災保安上の問題：地形、地質的な問題からこの地域が大変防災上、保安上危険な所である。
- ・通学路の安全性の確保：道路が急勾配になり、ヘアピンカーブも必須となり運転免許をとりたての学生には困難。
- ・建設できる平地が限られる：校舎間の距離や運動場と校舎との高低差が非常に大きくなる。その解消のためにエレベーターやエスカレータを配置すると管理運営費を要する。

3.3.1 常磐地区内が候補地に

1993 年 1 月 31 日には岐阜市長選があり、蒔田市長が後継者として指名していた浅野勇²⁷が当選し、同年 2 月 27 日より新市長となる。

浅野市長就任の翌月 1993 年 3 月議会では、常磐地区にて新たな移転候補地が浮上している事が明らかにされた²⁸。候補地に関して小瀬学長は次のような内容の答弁²⁹をした。

- ・城田寺山と同じく常磐地区内を候補地として検討中。
- ・城田寺山への移転構想の際には、約 12ha の取得地域中の約 4.9ha を校地、施設、運動場などとする計画をしており、新しい候補地でも同等の面積を希望したが、財政的な状況から約 3.6ha の面積で計画を立案するように求められている。
- ・短大としては移転できるが面積だが、将来四年制とする場合には周辺に拡張する事になる。
- ・将来構想に関しては、新学科の設立を含む改組を行う³⁰。

つまり、城田寺山を候補としていた際には四年制移行を見越して校地面積を検討していたが、新しく設定された敷地は四年制とするには面積が足りていないため、当面は改組しながら短大として充実させて行く事となったわけである。

3.3.2 喜多村学長の就任

城田寺山などへの移転が暗礁に乗り上げてから約半年後の 1993 年 2 月 4 日の学長選挙および翌 5 日の教授会の

承認を経て、1993 年 4 月 4 日から喜多村一夫³¹が新学長となる事が決まる³²。

なお、退任する小瀬学長は 1993 年 4 月 4 日付け岐阜新聞の中で、岐阜市の活性化には四年制の市立大学も必要であり、四大構想も出てくることを期待していると述べた。

3.3.3 常磐地区内の下城田寺が候補地に

喜多村学長就任の 1 年目の年の暮れ、1993 年 12 月 1 日付け岐阜新聞には、岐阜市が候補地を絞り地権者との交渉を開始した事が報じられた。

12 月 16 日付け中日新聞では、移転候補地に関して次のように掲載している。

- ・候補地は城田寺山と同じ常磐地区内で、城田寺団地の南、伊自良川を挟んで岐阜大学の東側の位置（図 4³³）。
- ・面積は約 3.6ha。
- ・11 月末に地権者と関係者への説明会を開いた。
- ・移転が完了するのは早くても 1998 年以降
- ・今後は地元の自治会が地権者らと折衝する。

また、議会³⁴の中で喜多村学長は、移転に合わせて 3 学科体制から 5 学科体制に改組しようと文部省と協議していたが、教員数と担当科目の関係から 5 学科体制の実現は困難となったため、4 学科体制を検討している事を明らかにした。

そして 1994 年 4 月 7 日付け中日新聞には、下城田寺の地権者が売却に合意したという記事が掲載され、いよいよ移転は加速していくものと思われた。

3.3.4 移転計画が再び暗礁に

しかし、1995 年 6 月 16 日付け岐阜新聞は『移転計画、暗礁に』と題する記事を掲載する。売却に合意したと報道された後には次のような事があった³⁵。

まず、市は地元自治会と話し合いを進めており、用地は自治会がまとめる流れで進んでいた。そして、1994 年 4 月に地権者から同意を得たが、地権者約 30 人³⁶のうち 5 人が同年 5 月に同意書を撤回し、自治会内で保留されていたという。そのため同年 10 月の地元説明会は、市側の意に反して紛糾。最終的に反対地権者は 7 人³⁷となった。反対理由は、自治会から詳しい説明がなかった事や、優良農地を手放したくない、というものだった。



図 4 候補地(下城田寺)の位置

3.4.1 香蘭が候補地に

1995年6月16日付け中日新聞には、浅野市長の話として、城田寺地区を断念する場合は、郊外に限らず若者を誘導できるメリットから、中心街などへの移転も含め検討する事が記載された³⁸。

そして、その記事から2週間後の1995年6月30日付け中日新聞には『香蘭地区を検討』と題する記事が掲載される。当時、JR岐阜駅の西方に位置する香蘭(図5)では再開発事業が行われていた³⁹。

同記事では、岐阜市は1995年秋までに下城田寺との用地交渉を打ち切る事、岐女短を香蘭地区の中心施設として誘致する事で同地区開発を一気に進めたい考えが示された。さらに、内部検討として早ければ1998年ごろまでに、市有地の高層ビルに短大施設の移転を完了させ、ビル内にファッションデザイン研究施設も併設し、産学協同施設を目指す事も記載された。

長良福光では校地が狭い事や周辺にコンベンション施設や運動施設が建設され、周辺環境が教育の場に適さなくなっている事も移転動機であったはずが、駅前の高層ビルの中という案までが浮上し、これまでとは大きく方向性を変えるのかと思われた。

3.4.2 下城田寺の最終説明会

香蘭が候補にあがったと中日新聞が報じたのと同じ日の岐阜新聞には、その日の夜下城田寺で最終説明会が開かれるとする記事が掲載された。

その翌日7月1日付け岐阜新聞には、『説明会も物別れ』と題する記事が掲載された。説明会には、地権者、自治会役員ら約30人と、市側からは浅野市長はじめ事務助役ら幹部8人が出席し協力を要請した。正式に断念するかは地元の最終回答を待って判断する事としたが、反対派からは用地取得には応じられないとの回答しか得られなかったという。

また同記事には、正式に断念する場合の他の候補地として、島校区の市有地、市北部で誘致希望のある複数の校区、香蘭地区などが挙げられた。

3.4.3 下城田寺を正式に断念

市は引き続き下城田寺との交渉を続けたが、遅くとも同年度中に移転先を決めたい意向であったため、同地への移

転は断念せざるを得ないと判断し、1995年12月15日に地元関係者約30人に正式に断念を告げた⁴⁰。

その事を報じる同年同月19日付け岐阜新聞の記事は『島校区移転が濃厚』と題しており、ここで島地区の市有地が次の候補地として有力である事が明らかにされる。

同年同月22日の市議会文教委員協議会では、次の候補地に関する事のほか、委員からは市側の対応のまずさを指摘する声相次いだ。主な指摘は、自治会に依存しすぎて、市の主体性が足りない、自治会から逐次報告をもらって適切に処理すべきだった、もっと早く断念できたはずといったもので、これに対し市側は、地元が誘致に動いた事業だったので当初は地元任せにしていた、県に開発行為の許可を降ろしてもらったので簡単に引き下がるわけにはいかなかったと答えたという。⁴¹

3.5.1 一日市場(島第二中学校用地)が候補地に

1996年3月14日付け岐阜、中日両新聞は、島地区の学校用地が候補に挙がっている事を報じた。この土地こそ、その後岐女短が新しく建設される場所である。

この土地は、島土地区画整理事業で生まれ、島中学校区が人口増加した際に島第二中学校を建設する予定としていた

市有地で、面積は約2.4ha。当時は、島南運動場として使われていた(図6⁴²)。当時、都市計画法の用途地域では第1種低層住居専用地域に指定されていた⁴³。

1996年3月議会では1998年度中の工事着工、2000年度中の移転、開校を目指すことが示されたほか、新たな候補地に関して様々な視点から質疑がされた。次にそれらをまとめる。

3.5.2 一日市場を候補地とした理由

候補地となった理由について、浅野市長は次のような内容の答弁をした⁴⁴。

- ・区画整理事業により、道路、上下水道、電力等、基盤整備が進んだ良好な市街地であること。
- ・長良川に近く、伊自良川が横を流れるなど豊かな自然環境に恵まれ、教育環境が整っていること。
- ・JR岐阜駅から約4キロの距離に位置し、路線バスの利便もあり、交通アクセスの確保ができること。

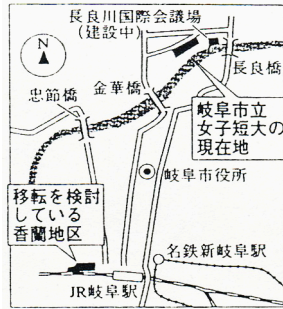


図5 候補地(香蘭)の位置



図6 候補地(一日市場)の全景

3.5.3 島第二中学校用地の行方

島第二中学校用地の建設、つまり島中学校の分離については、同議会にて教育長が次のような内容の答弁をした⁴⁵。

- ・少子化傾向に進んでおり、その後 20 年以上にわたって島中学校の分離の可能性は少ない。
- ・島中学校の分離の必要性が発生した場合、校区の見直しで対応する。

3.5.4 用途地域の問題

第1種低層住居専用地域では大学などの建設ができないという点については、同議会にて助役が次のような内容の答弁をした⁴⁶。

- ・都市計画法上の用途地域の変更、もしくは建築基準法による建築許可による対応が考えられる。

3.5.5 敷地面積の変化

敷地面積の変化に関しては同議会にて企画部長が次のような内容の答弁をした⁴⁷。

- ・桃林キャンパスの敷地面積は 18,015 m²であり、ここで定員 460 名の学生が学んでいる。
- ・候補地は 23,4795 m²であり、桃林キャンパスに比べ 5,464 m²(約 30%)広がる。

3.5.6 四年制のための敷地面積か

候補地での四年制への移行については、同議会にて喜多村学長が次のような内容の答弁をした⁴⁸。

- ・大学設置基準では、収容定員が 480 名程度の場合で、校地が校舎敷地と運動場に分かれる場合には、所要校地面積の 2 分の 1 以上が校舎敷地として必要とされる。
- ・別の場所に運動場を確保すると四年制への移行は可能。

3.5.7 一日市場に移転決定

1996 年 5 月 30 日に、一日市場を抱える島土地区画整理審議会が移転を了承した⁴⁹。それを受けて 6 月議会では、基本設計費、地質調査費として 2,500 万円が予算案に盛り込まれた⁵⁰。そして、議会最終日同年 6 月 25 日をもって漸く、1991 年以来続いていた新たな移転先探しは一日市場にて決着する。

同年 10 月 15 日には、創立 50 周年を祝う記念式典が長良福光の敷地に隣接する長良川国際会議場で開かれた⁵¹。当初目標としていたこの年の移転完了は果たせなかったが、移転先が決まり設計関連予算が盛り込まれた事で、岐女短は着実に次のステップへと進んだ。

1998 年 2 月には建設費など 21 億 8133 万 3000 円が次年度予算案に盛り込まれ、新聞記事⁵²に掲載された。また、

国際文化学科の新設、英文学科を英語英文学科に、被服学科を生活デザイン学科に改組する事や、新校舎の模型写真(図7)も掲載された。その後 1998 年 7 月 28 日には、建設地にて起工式が行われた⁵³。

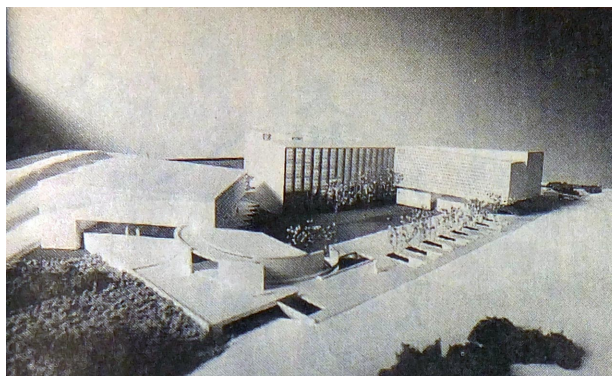


図7 新校舎の模型写真

4. その後

4.1 四年制への期待

1999 年 4 月 3 日に任期満了を迎え退任する喜多村学長に代わり、翌日 4 日から杉山道雄⁵⁴が学長に就任した⁵⁵。

同年同月 6 日の岐阜新聞によると杉山学長は、2003 年度以降には四年制大学へと移行したいと話したとされる。移転完了の予定は 2000 年だが、「2003 年度以降」としているのは、キャンパスの移転と学科改組後の最初の卒業生を出すまでは文科省への申請ができないためだという。

2000 年 1 月 25 日付け岐阜新聞には移転後の長良福光の跡地を県が駐車場として活用する検討をしている事が報じられるが、同記事の中でも早ければ 2003 年度にも四年制へ移行する予定と記載された。

さらに、2000 年 2 月 20 日付け岐阜新聞には、同じく杉山学長の話として、新キャンパスも将来の四年制に対応できる設計を採用したと記載された。また、同記事には新校舎の姿がカラーで掲載された(図8)。

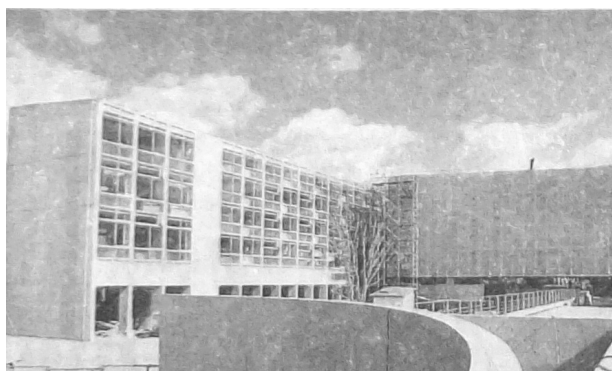


図8 一日市場の新校舎

4.2 移転の完了

2000年3月10日には桃林キャンパスに隣接する長良川国際会議場にて、長良福光で2年間を修了した学生の卒業式が行われた⁵⁶。翌日には長良福光の校舎にて、54年間で1万人を超える卒業生を送り出してきた桃林キャンパスとのお別れパーティが開催され、在校生や卒業生ら約800人が集まった⁵⁷。

そして2000年4月7日には新校舎完成式典が一日市場の新キャンパスにて行われ、移転は遂に完了した⁵⁸。

5. まとめ

本稿では、岐女短が桃林キャンパスから一日市場へ移転、開校するまでの一連の流れを、新聞記事を追いながら把握した。移転のきっかけとしては建物の老朽化や狭隘な校地だった事、敷地周辺の環境が大きく変化した事という事情が大きかったようだが、同時に大学に対する社会的な要請も、それを後押ししたものと考えられる。

移転先については、一日市場に決定するまでに、城田寺山、下城田寺、そして香蘭が候補地にあがっていた事が明らかになった。

移転に関する新聞記事や議会答弁には、大学組織の改変について触れる場面が多く見られたが、本稿ではそこに深く踏み込む事はしていない。また移転後についても今回の対象とはしていない。

謝辞

瀬尾副学長⁵⁹には、移転前の様子を教えて頂きました。ここに付し、謝意を表します

¹ 本来は「本学」とするのが相応しいが、あえて永く岐阜の地域で親しまれているこの愛称を略字とした。

² 一連の時の流れを追いやすいように西暦表記で記す。

³ “ひといちば”と読む。

⁴ 1997年2月28日から1993年2月26日まで岐阜市長。

⁵ 蒔田市長が移転を表明した1989年から遡って1980年頃からを対象とした。

⁶ タイトルのフォントサイズが最も大きいものを「主見出し」、それ以外を「袖見出し」と便宜上分けた。

⁷ 1989年第3回定例会（第2日目）本文

⁸ 1989年4月4日から1993年4月3日まで学長を務めた。

⁹ 1983年4月4日から1989年4月3日まで学長を務めた。

¹⁰ 1987年第5回定例会（第3日目）本文

¹¹ 1987年第5回定例会（第3日目）本文

¹² 1990年1月24日付岐阜新聞

¹³ 50年史 p.p.106

¹⁴ 1990年1月25日付中日新聞

¹⁵ 1990年11月7日付中日新聞

¹⁶ もう一つは岐阜市立岐阜薬科大学。

¹⁷ 1990年12月12日付岐阜新聞及び中日新聞

¹⁸ 1990年第5回定例会（第2日目）本文

¹⁹ 1993年以降の移転候補地にも下城田寺が含まれるため、下城田寺、打越、上土居を含む地区を便宜上、城田寺山とした。それらの地域はすべて常磐地区内にある。

²⁰ 1992年6月16日付岐阜新聞に掲載の図

²¹ 1991年2月16日付岐阜新聞

²² 1992年第4回定例会（第2日目）本文

²³ その後の国立大学法人岐阜大学

²⁴ 学校法人華陽学園岐阜女子大学

²⁵ 1992年6月18日付岐阜新聞及中日新聞

²⁶ 平成4年第4回定例会（第2日目）本文

²⁷ 1993年2月27日から2002年1月11日まで岐阜市長。

²⁸ 1993年3月17日付岐阜新聞及中日新聞

²⁹ 1993年第1回定例会（第2日目）本文

³⁰ 改組の内容を以下に議事録から引用する。

(略) 時代のニーズにこたえるために、新たに文科系学科として人間関係学科を設置し入学定員五十名とする。英文学科は英米学科として実用的な英語教育を重視する。食物栄養学科は入学定員八十名を五十名とする。被服学科は生活科学コース六十名、服飾デザインコース四十名を生活環境学科四十名、産業デザイン学科四十名の二科とする、この短大組織の上に二年の専攻科を設置して、英米学科、人間関係学科、生活環境学科、産業デザイン学科の四科にそれぞれ入学定員五名、学生総数四十名としての学士号取得の道を開くというものであります。(略)

³¹ 1993年4月4日から1999年4月3日まで学長を務めた。

³² 1993年2月6日付岐阜新聞及中日新聞

³³ 本稿で対象としている岐阜新聞にも図に掲載があるが、曖昧なため12月16日付朝日新聞の図を掲載した。

³⁴ 1993年第5回定例会（第3日目）本文

³⁵ 1995年6月16日付岐阜新聞及同年同月30日付中日新聞

³⁶ 中日新聞では30人、岐阜新聞では31人と記載が異なる。

³⁷ 1995年12月23日付中日新聞では、さらに8人まで増えたとされる。

³⁸ 1995年6月の議事録にはその旨の答弁は残されていないので、議会とは別の取材によると思われる。

³⁹ 1995年6月30日付中日新聞

⁴⁰ 1995年12月19日付岐阜新聞

⁴¹ 1995年12月23日付中日新聞

⁴² 1996年6月6日付中日新聞掲載の写真

⁴³ 1996年3月14日付岐阜新聞及中日新聞

⁴⁴ 1996年第1回定例会（第2日目）本文

⁴⁵ 1996年第1回定例会（第2日目）本文

⁴⁶ 1996年第1回定例会（第2日目）本文

⁴⁷ 1996年第1回定例会（第2日目）本文

⁴⁸ 1996年第1回定例会（第3日目）本文

⁴⁹ 1996年5月31日付岐阜新聞

⁵⁰ 1996年6月5日付岐阜新聞及同年同月6日付中日新聞

⁵¹ 1996年10月16日付岐阜新聞

⁵² 1998年2月27日付岐阜新聞及同年3月1日付中日新聞

⁵³ 1998年7月29日付岐阜新聞及中日新聞

⁵⁴ 1999年4月4日から1999年4月3日まで学長を務めた。

⁵⁵ 1999年2月13日付岐阜新聞及中日新聞

⁵⁶ 2000年3月11日付岐阜新聞

⁵⁷ 2000年3月12日付中日新聞

⁵⁸ 2000年4月8日付岐阜新聞及中日新聞

⁵⁹ 1984年から岐女短に在籍し、2016年度末をもって退職。